話題の移行と内容の変化の関係
話題境界調査の結果から

若松史恵

要旨

本稿では、9人に対して行った話題境界調査の結果から、人が話題の移行を判断した時点（話題境界）に着目し、その時点で話題が移行したと判断した人数と、内容の変化との関係を分析した。分析の結果、話題境界は一致人数1人～4人、5人～7人、8人～9人の3つのグループに分けられ、一致人数が多くなるにつれ、よりはっきりした内容の変化が捉えられていることがわかった。また、内容の変化のみならず、誰についての話題かという話題上の主体が変化することも話題の移行に関する判断に影響を与えていることが示唆された。最後にこのような複数の人の判断に基づいて話題の移行箇所を決定する際の基準について考察を行った。

キーワード
話題境界、話題展開型、話題区分、初対面会話

Abstract

This paper analyzes the relationship between people who judged that the topic had shifted at that point and the change in content, based on the results of a topic boundary survey. They showed that the topic boundaries were divided into three major groups according to the people in agreement, with more distinct changes in content being captured as their numbers increased. It was also suggested that the change in the subject of the topic, that is, who it is about, also influenced the shift. Finally, the criteria for deciding as to where the topic shifts based on the judgment of multiple people were discussed.

Key words
topic boundaries, types of topic development, topic divisions, first-encounter conversation

Relationship between Topic Shift and Change in Content
From the Results of the Topic Boundary Survey

Fumie Wakamatsu

1 はじめに

話題は複雑な概念であり、関連性や一貫性という概念と強く結びついているが、それ自体を特定することは難しく、話題の枠組み（topic framework）として捉えるべきであるとされる（Brown & Yule 1983）。一方、話題を会話者たちが相互行為的に作り出す流れとして捉える見方もあり（串田 1997）、「話題」をどのように捉えるかについて一致した見解は見られない。しかし、一方で我々は、流れるように続く会話の中にも、直感的にあるまとまり（話題）を見つけることができる。これまでの研究では、複数の人の判断に基づいて話題を捉える試みが行われてきたが、人の判断により捉えられた「内容のまとまり」としての話題の境界、すなわち話題が移行したと判断された箇所には、どのような内容の変化が見られるのだろうか。また、一人だけでなく、複数の人の判断が一致する箇所にはどのような内容の変化が見られるのだろうか。これまでのところ、人が話題が移行したと判断する箇所と内容の変化との関係はまだ十分に明らかになっていない。そこで、本稿では、話題が移行したと判断された時点に着目し、どのような内容の変化が話題の移行に関する判断に影響を与えているのかを考察する。

2 先行研究と本稿の立場

我々は流れるような会話の中にもあるまとまり（話題）を捉えることができるが、その話題の捉え方は人によって異なることが多い。これまで、このような話題の捉え方の多様性を利用し、複数の人の判断に基づいて話題を区分する試みが行われてきた。鈴木（1995）は、複数の調査協力者の指摘が一致した区分から認定することで、内容のまとまりとしての話題をより客観的に捉えられるという仮定のもと、5人の調査協力者による、4つの対話資料の内容区分調査を行った。調査は、調査協力者に対話資料の録画を見せた上で、「内容のまとまり」による区分をスクリプトに記させる方法で行われた。調査の結果認定された「内容のまとまり」は、調査協力者内では一定の程度のサイズが見られたものの、調査協力者間では大小様々な規模が見られたとしている。また、複数の調査協力者の区分が一致した箇所を「話段」と認定して分析した結果、「話段」の前後には接続表現やあいづち、沈黙等が見られ、「話題のまとまり」としての「話段」の認定には、複数の形態的指標が関わっていることが示唆されている。また、中井（2003）は、鈴木（1995）を参考に、5人の調査協力者に対して初対面会話3資料の話題区分調査を行った。調査の結果、区分された話題の開始部にはフィラーや質問表現などが、また、終了部にはあいづちや評価的発話などの言語的要素が見られたとしている。

鈴木（1995）は、調査協力者が捉えた内容のまとまりには大小様々な規模のものが見られたとしていることから、話題が移行したと判断される箇所には、人により多くのずれが生じていることがわかる。鈴木（1995）や中井（2003）はこのような判断のずれを前提に、複数の人の判断が一致する箇所で話題を区分し、そこに現れる接続表現やフィラー、あいづち、沈黙等の言語的・非言語的特徴について多くの知見を得ている。しかし、これまでの研究では調査協力者がどのような内容の変化を話題の移行として捉えていたのかについては明らかにされていない。人の判断の多様性を前提にして話題を区分するには、これまで研究されてきた言語的・非言語的特徴だけでなく、人がどのような内容の変化から話題の移行を判断しているのか、また、内容の変化と一致人数の多寡との関係についても明らかにする必要があるだろう。

そこで本稿では、複数の人に対して行った話題境界調査の結果から、人が話題の移行を判断した時点に着目する。そして、その時点で話題が移行したと判断した人数と、内容の変化との関係を分析することにより、どのような内容の変化が、話題の移行に関する判断に影響を与えているのかを考察する。

3 話題境界調査

3.1 話題境界調査の手順

若松（2020）は、会話における「内容のまとまり」の境界である話題境界を抽出することを目的として、9人の調査協力者による「話題境界調査」を行っ

た。調査協力者は20代～30代、男性3人、女性6人の日本語母語話者で、談話分析の専門的な知識を持たない者である（表1）。調査は、会話資料の音声を「内容のまとまり」を意識しながら1度聞き、その後文字化資料を見ながら再度音声を聞き、話題が移行したと思われる部分に線を記入する方法で行われた。会話資料は『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』から、20代前半の女性、学生の初対面二者会話を用い、会話開始から会話終了の合図前までの14分間を分析対象としている[注1]。発話の単位は、BTSJで用いられる「発話文」より短い単位である「長い発話単位」（Japanese Discourse Research Initiative 2017）が用いられている[注2]。本稿では、若松（2020）により用いられた日本語母語話者（以下、NS）同士の会話6資料を対象に、話題境界調査において、各調査協力者により話題が移行したと判断された箇所に着目し、話題移行箇所と内容の変化との関係を分析する。

表1　調査協力者の詳細

調査協力者	所属	専門／職種	年代	性別
JS1	大学生	経済学	20代	男性
JS2	大学生	社会学	20代	女性
JS3	大学生	社会学	20代	女性
JS4	大学院生	コミュニケーション学	20代	男性
JS5	大学院生	社会学	20代	女性
JS6	大学院生	教育学	20代	女性
JS7	社会人	ITエンジニア	30代	男性
JS8	社会人	医療	30代	女性
JS9	社会人	教育	30代	女性

3.2 調査協力者ごとの話題境界数

本稿では、調査協力者が話題が移行したと判断した箇所を話題境界とする。調査協力者ごとの話題境界数（表2）を見ると、調査協力者ごとの話題境界数の1資料当たりの平均は、JS3が37.5と最も多いのに対し、JS4は13.5と最も少ないことから、JS3はまとまりとしての話題を小さく、また、JS4はまとまりとしての話題を大きく捉える傾向が見られ、調査協力者により話題の捉え方に違いが見られることがわかる。

表2　調査協力者ごとの話題境界数

	JS1	JS2	JS3	JS4	JS5	JS6	JS7	JS8	JS9
合計話題境界数	92	102	225	81	106	124	96	137	111
平均話題境界数	15.3	17.0	37.5	13.5	17.7	20.7	16.0	22.8	18.5

3.3 話題境界における一致人数

話題境界調査の結果、調査協力者は様々な位置を話題境界と判断しており、話題の移行に関する調査協力者の判断は一様ではないことがわかった。しかし一方で、複数の調査協力者の判断が一致した箇所も多く見られた。そこで、表3に調査協力者の判断が一致した人数ごとの話題境界の数を示す。例えば、会話1では全部で66の話題境界が認定されたが、調査協力者のうち1人しか話題境界と認定しなかった箇所は31か所であったのに対し、9人全員の判断が一致した箇所は4か所であった。話題境界の合計は350か所であったが、調査協力者のうち1人しか話題境界と認定しなかった箇所が156か所と最も多く、話題の移行に関する判断は調査協力者により多様であることを示す一方、9人全員の判断が一致した箇所も16か所見られた。

表3　一致人数ごとの話題境界数

一致人数	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	合計
会話1	31	8	5	9	4	3	2	0	4	66
会話2	16	4	2	3	1	4	4	5	3	42
会話3	28	13	2	3	3	5	4	1	4	63
会話4	24	11	8	0	3	2	5	3	0	56
会話5	29	12	3	5	1	5	5	3	1	64
会話6	28	7	1	4	4	4	5	2	4	59
合計	156	55	21	24	16	23	25	14	16	350

4 分析

4.1 内容の変化：話題展開型

話題境界は、「内容のまとまり」として捉えられた話題の境界であることから、そこには何らかの内容的な変化が見られると考えられる。村上・熊取谷（1995）は、友人同士や姉妹の会話を対象とし、隣接するトピック間の連結タイプを、談話内容の結束性から、先行トピックの中で全く言及されていないことが後続トピックになる新出型、先行トピックで言及された事象からトピックが選ばれて導入される派生型、隣接トピック以前のトピックで語られた内容が再度後続トピックとして導入される再生型の3つに分類し、トピックの展開構造を捉えた。村上・熊取谷（1995）はトピックをまとまりとして捉え、それらのトピック同士がどのような関係で繋がっているのかに着目して連結型を分析しているが、本稿では話題が移行したと判断された箇所における内容の変化を分析する点が異なる。そのため、本稿では、話題境界の直後の第1発話を話題開始部とし、話題開始部と先行文脈との繋がりから村上・熊取谷（1995）を参考に話題展開型を定義する。

まず、話題開始部が、先行文脈と繋がりを持つか否かにより2つに大別する。さらに先行文脈と繋がりを持つ話題開始部を、話題開始部の直前の発話（以下、前接発話とする）と繋がりを持つものと、それ以前の発話と繋がりを持つものに分ける。そして先行文脈と繋がりを持たないものを新出型（①）とし、前接発話と繋がりを持つものを前接型（②）、前接発話より以前の発話と繋がりを持つものを前出型（③）とする。

発話が繋がっているかどうかは、同じ意味を持つ「繋がりを示す表現」の有無を基に判断するが、繋がりを示す表現に省略や言い換えがあった場合には、表現を補完して繋がりを判断する。なお、開始部が感動詞のみの場合は、その次の実質的な内容を持つ発話も含めて分析対象とする。また、前接発話とは、話題開始部の直前の発話を指すが、直前の発話が途中で中断されたり、あいづち等である場合は、その前の実質的な内容を持つ発話とする。以下に例を示す。→は前接発話、⇒は話題開始部、横線は話題境界を表す（以下、同様）。

①新出型

話題開始部4行目では住まいについての質問により、後続話題が導入されている。その直前の2行目と3行目はあいづちと考え、前接発話は1行目とした。前接発話1行目では年齢について話されており、4行目との間に内容的な繋がりは見られない。また、住まいについては前接発話以前の発話でも話されていないため新出型とする。

→	01	A	［年齢について］21です<笑い>
	02	B	うん
	03	A	そっか
⇒	04	B	え、どちらにお住まいなんですか?

②前接型

1行目から2行目にかけて、スペイン語を専攻するAは、第二外国語でフランス語を選択したため、英語ができなくなってしまったことを語っている。その後、笑いと少しの間を挟み、前接発話5行目でさらに「今困ってる」と発話している。これは「（英語ができなくなって）今困ってる」と理解できることから、話題開始部6行目との繋がりを認め、前接型とする。

	01	A	［第二外国語について］で英語をやめて<フランス語>{<}とったから
	02	B	<フランス語>{>}、うん
	03	A	もう全然英語ができなくなっちゃって<笑い>
	04	B	ははは<笑い>
→	05	A	今困ってる<笑い>
⇒	06	B	でも確かに英語はやらないと忘れますね?
	07	A	うん
	08	B	うん
	09	A	全然分かんない、もう

③前出型

話題開始部93行目では、Aに対し、英語について質問して後続話題が導入されている。前接発話89行目では日本文学について話されているため、89行目と93行目の間に内容的な繋がりは見られないが、発話をさらに遡ると1行目でAが英語科に所属していることが語られている。話題開始部93行目ではこの1行目で話された内容に基づいて後続話題が導入されているため前出型とする。

	01	A	今英語科のー2年でーす
			〔87行省略〕
→	89	A	[日本文学について]高校の時ちょっと頑張ったかなぐらいで
	90	B	うーん
	91	A	へー
	92	B	そっかー
⇒	93	B	でも英語科だったら、もう英語もペラペラで?

4.2 話題境界における一致人数と、内容の変化の関係

内容の変化を「新出型」「前接型」「前出型」の3つとし、話題境界における一致人数（以下、一致人数）との関係を分析する。一致人数ごとに、それぞれの型の出現数を表4に示す。表4を見ると、話題境界350か所の7割を超える261か所を前接型が占めているのに対し、新出型は32か所と最も出現数が少なく、話題展開型により、出現数に大きな違いが見られることがわかる。一方、一致人数ごとに話題展開型の出現割合を見ると、一致人数が最も少ない一致人数1人では、前接型が81%と多くの割合を占めている。それに対して一致人数が最も多い一致人数9人では前接型の出現割合は25%と下がる一方、新出型と前出型の出現割合が上がっており、一致人数の多寡により話題展開型の出現割合に異なる傾向が見られることがわかる。そこで、一致人数と話題展開型の関係を調べるため、表4に基づき対応分析を行い、図1の散布図を得た。分析にはR（version4.0.3）のCA関数を用いた。

対応分析では、各軸がデータをどの程度説明しているかを示す寄与率が与えられる。説明力の高い軸を解釈することでデータの中の最も主要な傾向について分析することができる。また、図1に示した散布図では、関連性が高い項目間ほど近くに付置され、関連性が低い項目間ほど遠くに付置される。

対応分析の結果、寄与率は、1軸が92.6%、2軸が7.4%であり、データの約9割が1軸で説明されることがわかった。そこで、図の左右の関係を示す1軸を中心に見ていくと、1軸の左側（負）と右側（正）で、一致人数1人から4人ま

表4 一致人数と話題展開型

	新出型		前接型		前出型		合計	
1人	12	(7.7%)	126	(80.8%)	18	(11.5%)	156	(100%)
2人	3	(5.5%)	45	(81.8%)	7	(12.7%)	55	(100%)
3人	0	(0%)	21	(100%)	0	(0%)	21	(100%)
4人	1	(4.2%)	20	(83.3%)	3	(12.5%)	24	(100%)
5人	2	(12.5%)	9	(56.3%)	5	(31.3%)	16	(100%)
6人	4	(17.4%)	15	(65.2%)	4	(17.4%)	23	(100%)
7人	3	(12.0%)	16	(64.0%)	6	(24.0%)	25	(100%)
8人	2	(14.3%)	5	(35.7%)	7	(50.0%)	14	(100%)
9人	5	(31.3%)	4	(25.0%)	7	(43.8%)	16	(100%)
合計	32	(9.1%)	261	(74.6%)	57	(16.3%)	350	(100%)

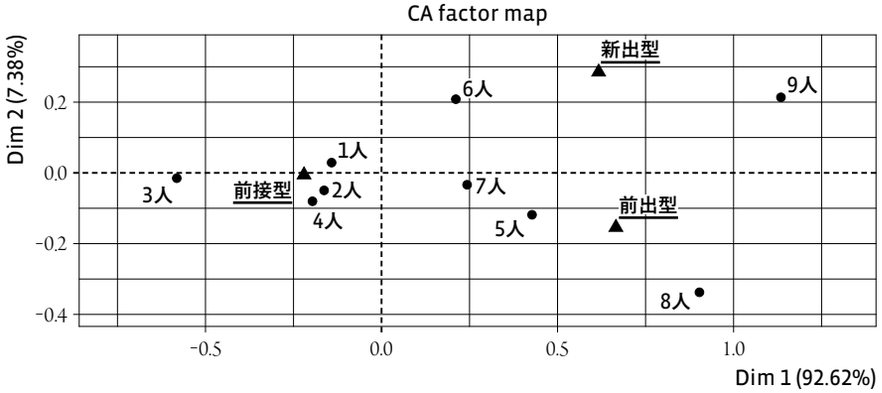

図1 対応分析に基づく一致人数と話題展開型の関係

でと、5人から9人までに大きく分かれていることがわかる。また、図の左側には前接型が、右側には新出型と前出型が分かれて付置されている。

さらに一致人数と話題展開型の関係を見ると、左側の前接型の近くには一致人数1人、2人、3人、4人が付置されており、互いの関連性が高いことが示されている。また、右側には新出型と前出型が付置されているが、一致人数5人、6人、7人は図の真ん中あたりに付置されており、新出型や前出型の位置により近い様子が見られる。そして、そのさらに右側の前出型の近くには一致人数8人が、最も右側には一致人数9人が付置されている。一致人数8人及び9人は、1軸との関係では前接型との距離がかなり遠いことから、いずれも前接型との関連性が低いという特徴を持ち、新出型や前出型との関連性の方が高いことがわかる。

このことから、1軸は一致人数1人から4人までと一致人数5人から9人までを大きく二分しており、さらに後者である一致人数5人から9人までは、一致人数5人から7人までと、8人から9人までの2つのグループに分けられると言えるだろう。

そこで、一致人数の多寡により一致人数1人から4人までを「一致人数の少ない話題境界」のグループ、一致人数5人から7人までを「一致人数のやや多い話題境界」のグループ、一致人数8人と9人を「一致人数の多い話題境界」のグループとして分け、図2にそれぞれのグループ内における話題展開型の出現割合を示す。

図2を見ると、一致人数の少ない話題境界では、内容の変化の多くを前接型が占めており、新出型や前出型の出現割合は低くなっている。前接型は、前接発話と繋がりを持つものであることから、直前に話された内容と繋がりを保っている箇所は、内容の変化が感じられたとしても、話題境界と判断されることが少ないことを示していると考えられる。次に一致人数のやや多い話題境界では、前接型の出現割合が下がり、新出型や前出型の出現割合が倍以上と大きく上がっている様子が見られる。新出型は新しい内容が導入されるものであり、また、前出型は以前話された内容と繋がりを持っているものの、前接発話とは繋がりを持たないものであることから、前接型と比べて、より内容の変化がはっきりと感じられる箇所である。そのため、より多くの人に話題境界であると

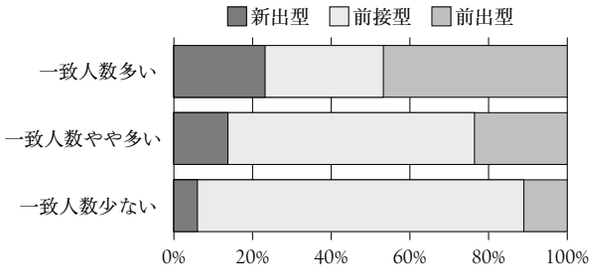

図2　グループごとの話題展開型の出現割合

判断されたと考えられる。さらに、一致人数の多い話題境界では、前接型の出現割合が大きく下がり、新出型と前出型の出現割合がさらに大きく上がっている様子が見られた。

以上から、一致人数の少ない話題境界には内容の変化が小さいものが多く、一致人数が多くなるにつれて、よりはっきりとした内容の変化が捉えられていることがわかる。そこで、次節では、話題境界に見られる内容の変化を会話例から検討する。

4.3 話題境界に見られる内容の変化

4.3.1 一致人数の少ない話題境界

（1）の前に、NS3は自身の専門が社会学であることを語っており、79行目の質問を受けて自身が受けた授業について語っている。その後86行目では、それまで語られていた授業内容について、さらに掘り下げる質問がされているが、その内容は前接発話と繋がりが見られるため、「前接型」とした。85行目では2人が、86行目では1人が話題境界であると判断していたことから、このように内容の変化の度合いが小さい箇所は、話題境界と判断されにくいと考えられる。また、木暮（2002）は、話題の転換に用いられる「へー」には、「今話している話題をまとめ上げ、終結に向かわせる働きをするとともに、新たな話題を持ち出すきっかけとなる」働きがあると指摘しているが、「へー」のような感動詞類を先行話題の終了部分と見るか、後続話題の開始部分と見るかにより、85行目の前後で判断が分かれる様子が見られた。

(1)	話者	発話内容	一致	話題展開型
79	NS4	社会学でー、具体的にーは?		
80	NS3	わたしは環境社会学よりなんですけどー		
81	NS4	うん		
82	NS3	でも去年はいろいろ、なんかなんだろ、ち、地域の、んーと都市の地域のな、な、こととか（うん）あと九州とかそういう田舎の地域のこととかー（ふーん）をとりあげたりとか（うんうん）してました		
83	NS3	去年は<笑い>		
84	NS4	ふーん		
85	NS4	へー	2人	前接型
86	NS4	でも社会学っていうとー、あのー、マックスウェーバーとかもやったりするんですか?	1人	前接型
87	NS3	あー、私は全然そっちじゃないんですけどー		

このように、前接型は一致人数の少ない話題境界に多く出現しているが、一方で一致人数のやや多い話題境界や一致人数の多い話題境界にも前接型が見られる。そこで（2）で一致人数の多い話題境界の前接型を検討する。

(2)	話者	発話内容	一致	話題展開型
91	NS3	で社会運動とか市民運動についての（うん）レポートとかを書いて（ふーん）わりと自由にやってました		
92	NS4	ふーん		
93	NS3	うん		
94	NS4	そうなんだ		
95	NS3	え、何を勉強されているんですか?	9人	前接型
96	NS4	えーとー今のところ所属は言語学ってことに（あー）なっているんですけど		
97	NS3	はい		

（2）は（1）の続きである。91行目まではNS3の専門についての語りが続くが、その後の95行目では、今まで自身の専門について語っていたNS3が対話相手であるNS4の専門について質問している。95行目では、前接発話と「専門」という繋がりが維持されているため、「前接型」としたが、調査協力者全員が話題境界であると判断していた。（1）は、前接発話の内容についてさらに掘り下げるものを検討したが、（2）の95行目では、それまでと同じ「専門」という繋がりを維持しながらも、誰についての話題か、すなわち話題上の主体となる人物がNS3からNS4へと移り変わっている。このように、前接発話と繋がりが見られても、話題上の主体に変化が見られることで、より内容の変化がはっきり感じられたことが一致人数の多さに影響していると考えられる。

4.3.2 一致人数のやや多い話題境界

(3)	話者	発話内容	一致	話題展開型
730	NS1	そうちょっと去年ロマンス語の授業受けてたから		
731	NS2	え、ロマンス語?		
732	NS1	そう、あのー<言語学>{<}の方だけど		
733	NS2	<スイスの>{>}?		
734	NS2	えー、え、だってあの、ロマンス語ってスイスの一部の地域で今話しているっていうやつ?		
735	NS1	そうなの?		
		[11行省略：NS1がロマンス語の定義について説明]		
747	NS1	それのことをロマンス語っていうみたいで		
748	NS2	はあ	1人	前出型
749	NS1	うん		
750	NS2	なんか私昔スイスに住んでいたんですよ	5人	前出型
751	NS1	あ		
752	NS2	ちょっとだけ		

（3）では、730行目でNS1が「ロマンス語の授業を受けていた」ことを語った後、733行目と734行目でNS2は「スイスの」を用いて2度質問するものの、なぜここで「スイス」という言葉が発せられたのかは語られていない。NS1のロマンス語の定義についての語りが終わった後、750行目で、NS2は「スイス」について、自身が昔住んでいたことを語っている。750行目は前接発話とは繋がりが見られないが、少し前に語られた内容と「スイス」という繋がりを持つ

ため、「前出型」とした。(3) の前出型は、(1) で検討した前接型よりも内容の変化をよりはっきりと感じられ、そのことが一致人数の多さに影響していると考えられる。また、(3) では、748行目で1人が、750行目で5人が話題境界であると判断していたが、このように感動詞類で調査協力者間の話題境界の判断が若干ずれたことで、748行目のように一致人数の少ない話題境界にも前出型が見られる結果となっていた。

4.3.3 一致人数の多い話題境界

(4)	話者	発話内容	一致	話題展開型
71	NS3	なんかわたしのほんとに知り合いの人 が（うーん）その知り合いのひ<笑い>（うんうん）知り合いの人から あの職場の人から（うん）来たから あのー そういうメールをもらったのでー		
72	NS4	あー、そうなんだ		
73	NS3	だから全然 全然 全く<笑い>（うんうん）知らなくて		
74	NS4	あ、そうか、そうなんだ		
75	NS4	[息を吸う]えー、何勉強してらっしゃいます?	9人	新出型
76	NS3	社会学です		
77	NS4	社会学?		
78	NS3	はい		

(4) では、73行目まで会話参加のきっかけとなる共通の知人との関係について話すことで、お互いの関係の確認を行っている様子が見られる。その後、75行目の質問により後続話題が導入されているが、それまで話されていた共通の知人とは繋がりのない専門についての話題が導入されているため「新出型」とした。調査協力者全員の9人が75行目を話題境界であると判断していた。先行文脈とは全く異なる話題が導入される新出型は、話題の境界がよりはっきりと示されるため、一致人数の多い話題境界に多く現れたと考えられる。

5 まとめと考察

本稿では、人が話題の移行を判断した時点に着目し、その時点で話題が移行したと判断した人数と内容の変化との関係を分析した。分析の結果、一致人数が少ない箇所では、その大部分を、内容の変化の度合いが小さい前接型が占めており、一致人数が多い箇所では、新出型や前出型など、内容の変化の度合いが大きいものの出現割合が増えるという違いが示された。しかし、新出型や前出型と比較して内容の変化の度合いが小さい前接型であっても、誰についての話題かという話題上の主体が変化することにより、一致人数が多くなる様子が見られたことから、話題の移行には、内容的な繋がりの他に、話題上の主体という要因が関係している可能性が示唆された。また、内容の変化には、談話標識などの言語形式が大きく関わっている可能性も考えられる。そのため、言語的特徴と内容の変化との関係についての詳しい分析を今後の課題としたい。

最後に、本稿で行った調査では、話題境界は、一致人数が少ない話題境界、一致人数がやや多い話題境界、一致人数が多い話題境界の3つに大きく分けられた。一致人数の少ない話題境界では前接型が多く、内容の変化の度合いが小さいものしか捉えられていないという面がある。しかし、一致人数の多い話題境界では、新出型や前出型という明確な内容の変化を多く捉えられる一方で、前接型の特徴を捉えきれていないという面がある。そして、両者の中間にある一致人数のやや多い話題境界では、前接型の特徴を捉えながら、新出型や前出型の特徴も捉えられていた。そのため、このような複数の人の判断の結果から、より多くの人の判断が一致することで話題の移行箇所としての客観性が高まると仮定するならば、本稿の場合、5人以上の判断が一致する箇所を話題の移行箇所とすることの妥当性は高いと言えるだろう。本稿で行った話題境界調査において、5人とは調査協力者9人の過半数を示している。そのため、このような複数人の判断に基づいて話題の移行箇所を決定する場合に、過半数を一つの基準とすることは、一般的な判断基準としてだけでなく、データからもその妥当性が示唆されたと言える。

〈一橋大学大学院生〉

注

[注1] …… すべての会話は約15分間収録されているが、一番早く会話終了の合図があった会話に合わせ、会話終了の合図前までの14分間が分析対象となってい

る。本稿で使用したデータは会話番号157、160、251、252、253、254である。若松（2020）では、母語話者の話者IDを「NS＋番号」に、学習者の話者IDを「CJL＋番号」に統一して表記している。本稿もそれに倣う。本稿の話者IDと『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』の話者記号は次の通りである。NS1（J1）、NS2（J2）、NS3（J3）、NS4（J4）。括弧内は『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』の話者記号。

［注2］……「長い発話単位」を用いるのは、予備調査において、BTSJの「発話文」の途中で話題を区切る調査協力者がおり、より短い単位である「長い発話単位」が適当であると判断されたためである。よって、BTSJの発話データに対して「長い発話単位」を基準として改行位置等に修正が加えられている。なお、本稿では、以下、発話とは「長い発話単位」により区切られたものを指す。

参考文献

串田秀也（1997）「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰（編）『コミュニケーションの自然誌』pp.173–212.　新曜社

木暮律子（2002）「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』(5), pp.5–23.　凡人社

Japanese Discourse Research Initiative（2017）「発話単位ラベリングマニュアル version2.1」http://www.jdri.org/resources/manuals/uu-doc-2.1.pdf（2021年7月17日参照）

鈴木香子（1995）「内容区分調査による対話の「話段」設定の試み」『国文目白』34, pp.76–84.　日本女子大学国語国文学会

中井陽子（2003）「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, pp.71–95.　早稲田大学日本語研究教育センター

村上恵・熊取谷哲夫（1995）「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, pp.101–111.　表現学会

若松史恵（2020）「母語話者の話題開始部冒頭に現れる言語形式―学習者との比較から」『日本語／日本語教育研究』11, pp.51–66.　ココ出版

Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse analysis*. New York: Cambridge University Press.

資料

宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』

文字化記号

本稿で主に使用した記号は以下のとおりである。

<>{<}：重ねられた発話　（）：短いあいづち　<笑い>：笑い

<>{>}：重ねた発話　［］：文脈情報　？：疑問文